

神奈川県立生命の星・地球博物館

## 友の会通信

Vol. 10, No.2, 通巻53号 2006.7.10 発行

## 目次

|                  |               |
|------------------|---------------|
| 新館長あいさつ……………1    | 会員の活動紹介……………9 |
| 身近な自然シリーズ…2・3    | 何でも好奇心……………10 |
| サロン・ド・小田原……4     | 情報クリップ……………10 |
| 活動報告……………5・6・7・8 | 博物館講座に参加して…11 |
| 私の選ぶこの一冊……………9   | 行事案内……………12   |

## 楽しい博物館をつくりたい

館長 斎藤靖二

この春から、楽しいナチュラリストの前館長・青木淳一先生の後を引受けることになった新米の館長です。前館長と同じように、自然をつくっているものや自然で起こっている現象など、とにかく自然が大好きです。館に来て早々に友の会の集まりに参加する機会を得て、皆さんの熱気を感じることができ、とても嬉しく思いました。博物館の活動は、博物館で働いている人だけでやるものではなく、多くの方々と共に作り上げていくものだからです。友の会の皆さんのパワーは、新米館長の心細さを吹き飛ばしてくれました。友の会と博物館は、博物館活動を進めていく両輪といってよいでしょう。強い絆で連携しながら、楽しい博物館を作っていきたいと願っております。どうぞよろしく。



私の専門は地質学で、博物館の自然史系研究部門で長いこと働いてきました。地質学を始めるきっかけは、宿も決まらないまま入学し、地質学を専攻していた先輩の下宿に居候してしまったことであつたように思います。周りには、何も語らない石ころから、まるで魔法のように面白い情報をとりだしては議論する変人がゴロゴロいて、先輩たちの話をききながら実験作業を観るのは楽しいものでした。また、当時はみんな貧乏で、遊ぶうにも遊ぶ場所もなく、何も分からないまま山歩きに付き合っ、ただひたすら汗をかくだけでした。しかし、ときに自然の中で何かを発見して、先輩や先生と一緒に興奮した経験は忘れられないものでした。おそらく、それが科学というものとの出会いだったのかもしれない。

地質学の面白さを実感したのは、ずっと成因不明

であつた造山帯を特徴づけるチャートという硬い岩石が、放散虫(ほうさんちゅう)や珪質海綿(けいしつかいめん)の骨針(こっしん)の集合体であることを実証したときでした。チャートは、陸源の砂粒をまったく含まないことから、陸から遠く離れた遠洋性堆積物であつて、海洋底の移動とともに陸側へ付加したものと考えるを得ませんでした。チャートが分布する地帯は、石灰岩からフズリナやサンゴ化石が出たものの、ほとんどは無化石とされ、根拠のないまま古生層とされていました。ところが、チャートから三畳紀のコノドントや放散虫が、周囲の泥岩からジュラ紀の放散虫がでることが明らかにされて、日本列島の歴史はすっかり書きかえるはめになりました。このことは、太平洋側に分布する四万十帯が、白亜紀から第三紀にかけての付加体であることが証明されたことに始まるのですが、放散虫革命ともよばれています。チャートとの付き合いは、日本列島の生い立ちの再考につながり、さらに付加テクトニクスという変動帯地質学の確立と、地球の大きな動態を考えることにもつながってしまいました。

博物館には、太陽系や地球の歴史から、生物の多様性や人類社会での話題まで、多岐にわたる標本資料が蓄積されています。それらすべてが再現性のない現象を記録した情報の塊です。それぞれが最新の科学で裏付けられているものですが、科学の進歩と共に、さらに調べられていくと、新たな発見が期待される研究素材でもあるわけです。だから、博物館の標本資料は、研究してもらえばもらうほど内容が充実し、さらにより展示資料として活用できるものとなります。自然史の標本資料は、単に名前をつけて整理しただけの骨董品のようなものではありません。どれもずっと生き続けて、自然の不思議さをいろいろと語ってくれるものです。これらを維持し、さらに資料を蓄積し、子どもたちに自然の楽しさを伝えていくのに欠かせないのは、博物館でしかできない活動をご理解くださっている友の会、ボランティアの皆さんの力です。一層の活躍を期待しております。

## 博物館周辺の身近な自然シリーズ(その13)

### 吾性沢地区の植物

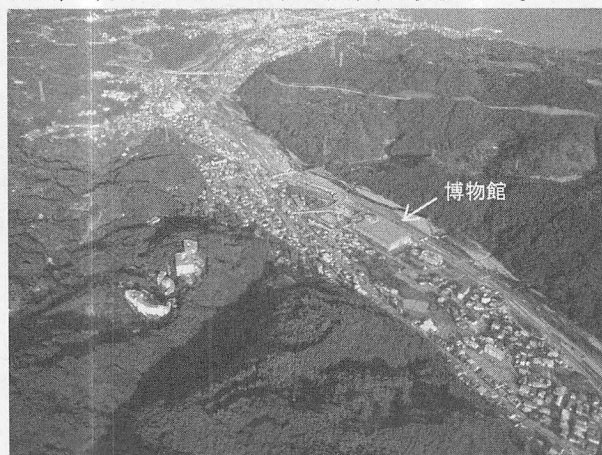
学芸員 田中徳久

この「博物館周辺の身近な自然シリーズ」では、学芸員が順番に、それぞれの視点でさまざまな自然を紹介してきました。今年から学芸部の友の会担当になったこともあり、いよいよ私の番…。うーん。何を書けば良いのやら。…などと前置きが長いのは私の癖で、講演でも観察会でも、本題よりも前置きが長いのが私の話なのです。それはさておき…

#### ■吾性沢(ごしょうざわ)地区での調査

博物館開館以来、多少の紆余曲折はあるものの、いろいろな専門分野の学芸員と博物館周辺の自然を観察する、事前申し込み不要の観察会「身近な自然発見講座」が継続的に開催されています。最近では、細かいコースは別にし、その時々で、1号線の東側に向かう「長興山コース」と、早川を渡って進む「石垣山コース」の2つのコースがあります。最近では、出川学芸員がボランティアの人たちと組織的に菌類調査を行っていますが、「長興山コース」の吾性沢地区は、実は植物についても調べたことがあります。その調査は、小田原市の「緑の環境保全地区」指定に関する基礎調査として実施したもので、その成果は、植物群落については、神奈川自然誌資料の19号79-88頁に「小田原市入生田吾性沢地区の森林群落」(田中ほか、1998)として、植物相については、同号89-100頁に「小田原市入生田吾性沢地区の植物相」(高橋ほか、1998)としてもまとめられています。ここではその報告を元に、吾性沢沿いの植物相と植物群落について紹介してみます。

なお、今更ではありますが周囲の状況を…。吾性



ヘリコプターからの写真：上空から博物館周辺をみる

沢は、箱根古期外輪山の最東端に位置する塔ノ峰の東側斜面に位置し、地形は中央を流れる吾性沢の侵食により急峻で、谷は深く、一部では激しく土壌が流失しています。また、人家(廃屋含む)やミカン畑(放棄畑含む)もあり、人為の影響を強く受けている立地もあります。

#### ■吾性沢の植物相

前述の高橋ほか(1998)によると、107科461種の維管束植物が記録されています。調査面積が狭く、調査地内には、照葉樹林、スギ・ヒノキ植林、畑地、道路などのみがあり、市街地や水田などの立地を欠く割には種類数が多いといえます。特徴としては、調査地がヤブツバキクラス域(照葉樹林帯域)であるために、暖温帯性植物が主体を成していること、人為的な影響も強いため、多くの種が国内に普遍的に分布するものであること、冷温帯性植物が少数ですが記録され、冷温帯性植物の下降減少があること、などがあります。

これらの中で、吾性沢地区あるいは近隣地域で比較的希少なものとしては、冷温帯性の種であるシシガシラやマメザクラ、カスミザクラ、クロテンコオトギリ、レンブクソウなどがあり、稀産種としては、タツノヒゲやナギラン、エビネ、クマガイソウ、ニガカシュウなどがあります。

なお、最近では、出川学芸員が、タキシダ(神奈川県レッドデータブックでは絶滅危惧種とされる)を発見していることも付記しておきます(出川2004 Flora Kanagawa (58): 723-724)

#### ■吾性沢の植物群落

さて、私の本業の植物群落です。植物群落は言うまでもなく、植物の集合体です。1種の植物が1つの植物群落を作ることありますが、1個体では普通は植物群落とは呼びません。多くの場合、複数種の植物の複数個体が集まって1つの植物群落を作ります。私は、どんな植物がどれくらい集まってその植物群落が成り立っているかを調べています。しかし、植物群落同士の境目には線が引いてあるわけではありません。周囲にも目を配り、その植物群落のもっとも典型的と思うところで、頭の中に線を引き、どんな植物がどれくらいあるかを調査します。そしてそんなデータをお互いに比べて、「群集」だとか「群落」だとか呼ばれる植物群落の単位(植生単位)を見つけ出すのです。

このような考え方で吾性沢地区の植物群落について調べ、その森林群落について報告したのが、前述

の報告です。この田中ほか(1998)では、やや断片的なものも含め、ヤブコウジースダジイ群集、タマアジサイーフサザクラ群集、ケヤキミズキ群落、イヌシデーミズキ群落、クサイチゴータラノキ群集、スギ・ヒノキ林、マダケ林の7つの森林群落を報告しています。

ヤブコウジースダジイ群集は、スダジイやヒイラギ、ヤブニッケイ、イヌマキ、アリドウシ、オオイタチシダ、イタビカズラ、ウラジログシなどで特徴づけられる常緑広葉樹林、タマアジサイーフサザクラ群集は、フサザクラやタマアジサイなどで特徴づけられる先駆的な落葉広葉樹林、ケヤキミズキ群落は、高木層にケヤキやクマノミズキが優占し、コクサギを含むこと、イヌシデーミズキ群落は、高木層にミズキやイヌシデーが優占することでそれぞれ区分され、クサイチゴータラノキ群集は、キブシやカラスザンショウ、ヌルデ、アカメガシワなどで特徴づけられる遷移途上にある植物群落、スギ・ヒノキ林は、スギ・ヒノキの植林地、マダケ林は、マダケの植林地です。

この中で、地域の自然を考える上でもっとも重要であるのは、本地域の気候的な極相群落であると考えられるヤブコウジースダジイ群集です。ヤブコウジースダジイ群集には、上記の種のほか、ヒサカキやアオキ、トベラなどの常緑低木、ナガバジャノヒゲやベニシダ、マンリョウ、オニドコロなどが生育しています。林冠はスダジイに被われることが多いですが、一部の林分ではヤマザクラやハリギリなどの夏緑広葉樹も林冠を形成しています。しかし、吾性沢のヤブコウジースダジイ群集とされた植分の多くは、外観はスダジイの巨木が生い茂る立派なものですが、土壌の流失が著しく、林床に生育する草本植物が少ないのが気にかかります。

また、タマアジサイーフサザクラ群集は、多くの場合、ブナクラス域(冷温帯域)の植生単位として扱われていますが、本地域は、ヤブツバキクラス域に位置します。田中ほか(1998)は、海拔高は低い

ものの、溪流沿いという生育立地や、フサザクラやタマアジサイを含むこと、他地域ではタマアジサイーフサザクラ群集を特徴づけるとされるウリノキやジュウモンジシダ、ミヤマハハソが周辺には生育することから、タマアジサイーフサザクラ群集としてまとめました。その意味では興味深い植物群落です。

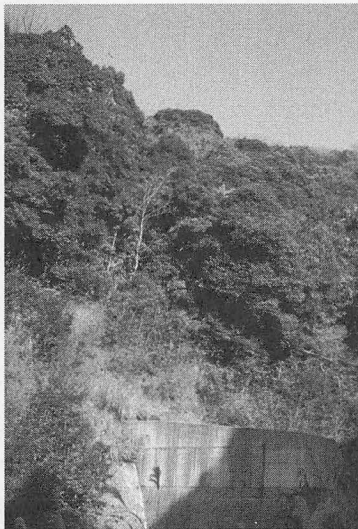
それでは森林群落以外の植物群落はどうでしょう。田中ほか(1988)では森林群落のみを対象としていますが、その基礎になった小田原市の「緑の環境保全地区」指定に関する基礎調査の報告書には、いくつかの草本群落も報告されています。2次草原としてチガヤススキ群落、林縁性低木一つの植物群落としてクズ群落、カナムグラ群落、ヤブカラシークサマオ群落、路傍群落としてシャガ群落、キチジョウソウ群落、踏跡群落としてカゼクサーオオバコ群落の7植生単位です。しかし、それでも、畑地(ミカン畑)の雑草群落や吾性沢の冠水立地の植物群落など、未調査のものがああります。特に、出川学芸員が発見したタキシダの生育立地も含め、古い石垣や吾性沢の溪岸などの岩隙の植物群落は興味深く、調査の必要性が高いと考えています。

## ■おわりに

当時、吾性沢地区だけでなく、博物館に隣接する水田や早川の河川敷など、もっと博物館周辺に調査範囲を広げ、博物館周辺の植物相と植物群落をまとめよう、との話をしました…。ですが、その後10年近くが経過しましたが、その計画はまだ実現していません。出川学芸員に刺激を受け、そろそろ再調査をはじめようか、と思う今日この頃です。…がいつになることやら…。

それはともかく、会員の皆さんも、植物や昆虫、鳥などの“種”だけでなく、ここで紹介した植物群落のように、いろいろなものが集まった集合体として身近な自然を眺め直してはいかがでしょうか？ かく言う私も、植物の集合体としての植物群落だけでなく、昆虫や鳥、その他の動物の生活場所としての植物群落、さらには、さまざまな地学的な事象の上に成立している植物群落として、もっとグローバルな視野に立ち、身近な自然を見直したいと思っています。その意味では最初に紹介した「身近な自然発見講座」は、さまざまな専門分野の学芸員が参加する観察会で、私にとっても、異なる専門分野の学芸員の話の聞くことができる貴重な時間でもあるのです。

ガイドブック：生命の星・地球物語「照葉樹林の植物」  
(姉妹編「雑木林の植物」「ブナ林の植物」)



吾性沢に沿った斜面に  
広がるスダジイ林

## 活動報告

### 共催事業〈サロン・ド・小田原〉

#### 第70回 『ダニと共に50年』

生命の星・地球博物館 前館長 青木淳一

5月11日(木) 講演会70名、茶話会57名

青木前館長の50年は、何と波乱に満ちていたとか！ ダニに取り付かれたとよく話されていましたが、研究者というのは、対象に突き進むと危険を顧みないものですね。実に楽しい講演でした。退任後は、現在も続けられている日本全国の土の採集、そしてダニの分布地図を作成されるとのことです。ますます熱く前向きな姿勢に、皆さんから温かい拍手が送られました。6年間、友の会を支えていただき、本当にありがとうございました。(中村恭子)

#### ＜参加者のアンケートから＞

◆私の印象に残った話は二つあります。一つ目は、ダニにえさをやったりして、家畜にしているアリがいるということです。二つ目は、ダニが作ったチーズ(注)があることで、ほんとうにびっくりしました。食べたら、おいしかったです。(小4年)

注：ミモレットという名のフランス産硬質チーズ

- ◆ダニの世界を垣間見る事ができた気がしました。
- ◆青木さんの楽しそうなお仕事ぶりを見て、私もあやかりたいと思いました。しかし自然は危険がいっぱいですね。何度も危険な目にあっているのに命拾いをして、運もいい人なのだと思います。
- ◆昭和20年代、科学朝日に有害動物の話が連載されていた佐々学先生の話が懐かしい。写真や図の多い講演でわかりやすく、面白かった。
- ◆研究の楽しさがとても良く伝わり、自分でも何かしてみたくくなりました。

#### 第71回 『日本列島は寄木細工』

生命の星・地球博物館 館長 斎藤靖二

6月29日(木) 講演会67名、茶話会43名

日本列島は、大陸をつくっていた地質体、遙か海の彼方から海洋プレートが運んできた地質体、プレートの沈み込み帯からできていて、基盤構造・骨格は寄木細工のようであることは、定説となっていま

す。今日の講演は、この定説が確立するまでの長い道のりについて、明治以降現在に至るまでの地質学史概略の紹介が中心となりました。特に現代、1960年代からは、館長自らの研究活動成果が、実はこの地質学史の主要部分を構成していることがよく分かってきました。まだ大陸移動説が日本の学会で認められていない頃に濱田前館長に意見をいただいたこと、「チャート」研究で昭和天皇に侍講(じこう)した際に、天皇から分類学を奨められたことなどいろいろなエピソードが、披露されました。館長の研究者としてのモットー「それでもめげない」についての紹介もありました。

続いての茶話会では、「寄木」にかけて「寄石」と題して、参加者が思い出の石を持ち寄って館長に産地をあてて貰うという趣向で盛り上がりしました。



持ち寄った石ころの同定をさせていただく

さすが館長！ 「自信がないな」とつぶやきながらも日本国内の石については正解の連続で、持ってきた人たちと会話が弾みました。今回の持ち寄り品は石だけではなく、山下学芸員の釣り上げたマゴチに新井田学芸員が包丁さばきを披露した刺身も好評でした。心もお腹も満足な一時でした。(星野和子)

#### 今後の予定

サロン・ド・小田原は、博物館を軸にして、皆さんと学芸員や研究者が気軽に交流できる場です。いま各地で行われているサイエンスカフェに近い催しといえます。話題提供からなる講演は講義室で、続く茶話会はレストランが会場です。2ヶ月に1回のペースで開催しています。茶話会では、講演に関連した資料などを囲みながら、自由な交流の場となるように企画をしています。

|      |           |       |        |
|------|-----------|-------|--------|
| 第72回 | 8月12日(土)  | 松田輝雄  | 17:30～ |
| 第73回 | 11月4日(土)  | 出川洋介  | 17:30～ |
| 第74回 | 12月16日(土) | 新井田秀一 | 17:30～ |
| 第75回 | 2月未定      | 勝山輝男  | 未定     |

## 第27回植物観察会 in 春の高尾

4月21日(金)晴れ 28名

春の高尾で植物観察会を行いました。ケーブル高尾駅前に集合し、6号路を登り、稲荷山コースを降りてきました。参加者を2グループに分けて、それぞれ勝山・田中学芸員にご指導いただきました。



高尾山山頂にて

沢筋には、ニリンソウ・レンプクソウ・ヤマネコノメ・ヨゴレネコノメ・チドリノキなどが咲いていました。常緑樹と落葉樹の特徴などを観察し、資料のカエデの仲間の検索表を使って見分け方を教わりました。山頂では遠く富士山も見られ、下りは常緑広葉樹・ミツバツツジ・カンアオイ・チゴユリ・アケボノミレなどを見ながら、和気藹々（あいあい）と下りてきました。登りでたくさんの学校の遠足の列に会い、予想の通り、落ち着いて観察できなかったのは少し残念でした。

(中山博子)

## 箱根巡検パートII

白金林道沿いの古期外輪山溶岩の観察

4月22日(土)晴れ 38名(他スタッフ3名)

箱根火山体を構成する岩石の観察は昨年の真鶴半島に続いて2回目です。外輪山に分布する溶岩が同じでない(時期も給源も異なる)ことを自分の目で確かめるのがねらいです。方法ですが、林道に沿って歩き「調査中」の露頭で標本を採取し、それを銘々のコース図にその場で貼付けました。分布が一目でわかります。

これと顕微鏡写真や化学分析値のデータを参照して岩石名を自分なりに判定します。

この作業はよく考える時間が必要であり、宿題になりましたが、後日ほぼ半数の方が提出されました。

(新藤誠一郎)



出発前ミーティング(しとどの岩窟入り口で)

## 博物館バックヤード探検隊

4月29日(土・祝)曇り 大人4名、子ども1名

参加者は少数でしたが、熱烈な生命の星・地球博物館ファンの方がいて、この催事は昨年11月に続き2度目のご参加、博物館のバックヤードが見たくて、遠路はるばるお出かけいただきました。案内人は大島学芸員、会話の弾む探検となりました。

途中標本製作室では、出川学芸員が菌の観察について熱く語るのを聞き、普通の見学者には強烈過ぎてそそくさと通り過ぎる冷凍室や大型標本製作室をじっくりと見学。そして大型収蔵庫の膨大な標本類に圧倒されつつ、光り輝く標本がドイツ箱に収まる昆虫収蔵庫を見ていただきました。一回りした後の質疑応答も、熱心なやり取りが行われました。企画実施担当者の手前味噌ですが、参加された方々の満足度は高かったと思います。

また、やります！ぜひご参加ください。(関口康弘)



ホオジロザメの骨  
大型標本製作室



探検隊看板

## 早川の春 野鳥子ども観察会

5月3日(水・祝) 快晴 大人16名、子ども8名

講師は山科鳥類研究所OB笹川昭雄さん。博物館から湯本までの水辺を往復し、早川周辺を飛び交う40種の野鳥を観察しました(カワセミ、ゴイサギ、アオサギ、イソシギ、キセキレイ、セグロセキレイ、カケス、チョウゲンボウなど)。観察会の途中、桜の木になかなか見ることのできないミツバチの分蜂を発見。何処に行くのかな? (佐藤昭男)



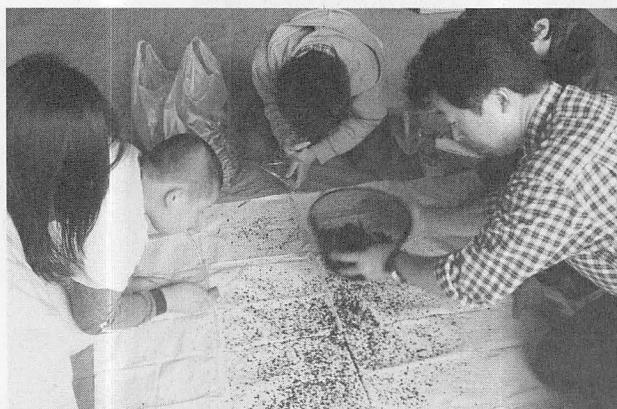
早川左岸から野鳥観察

## 土の中の虫ウオッチング

5月14日(日) 雨のち晴れ 大人18名、子ども12名

講師は獨協医科大学助教授の石井清先生です。参加者は小学校低学年が多かったのですが、真剣に土の中の虫を探し、観察していました。

また、石井先生のご専門の「ムカデ、ヤスデ」のお話にお父さん、お母さんたちも熱心に質問していました。ムカデやヤスデが自然の中で何を食べてどのように生活しているのか、日本にもたくさんの種類のムカデ、ヤスデがいることを知りました。楽しい一日を過ごしました。(矢野倫子)



土をふるって虫を探す参加者

## 親子で遊ぶ ざくろ石を集めよう

5月20日(土) 子ども39名、ほぼ同数保護者

講師 加藤昭氏(国立科学博物館名誉研究員)

初めての試みで、砂鉄に代えざくろ石の採集と観察を行いました。参加者は保護者同伴の児童から若者などです。

スタッフが河口湖町で採集し、細かく砕いたものを教材とし、デイサイトという火山岩に含まれている0.5~1mm程の濃赤色の結晶を、ピンセットで真剣に摘んでは、用意された袋に大事そうに入れていきます。標本の、もう少し大きな結晶のざくろ石や他の種類の結晶とも見比べました。双眼実体顕微鏡をのぞくと、「うわ〜!きれい!」の声。そう、石榴(ざくろ)石は英語でGarnet(ガーネット)と言う鉱物で、小さくても24面体の結晶で、1月の誕生石として知られています。(長山武夫)



各テーブルでボランティアさんから説明を受ける参加者

## 春の昆虫探検隊

ブナとカタクリと春の女神ギフチョウと

5月27日(土)・28日(日) 大人6名、子ども8名

「春の昆虫探検隊」は新潟県十日町市松之山で、予定を2週間遅らせての開催となりました。講師は高桑学芸員と苅部学芸員のお二人。

お目当てのギフチョウは舞っている姿もほとんど見られず残念でしたが、カンアオイの葉にはたくさん卵が産み付けてあるのが見つかりました。

また夜には苅部学芸員の仕掛けたトラップを近くの池に見に出かけ、ゲンゴロウ、コオイムシ、沼エビ、イモリ、モリアオガエル、アカガエルなどと、クロサンショウウオの卵を観察することができました。棚田がある里山の風景、ブナの新緑、1mの残

雪、雪どけとともに一気に始まる雪国の春を楽しんできました。  
(渡邊かをり)



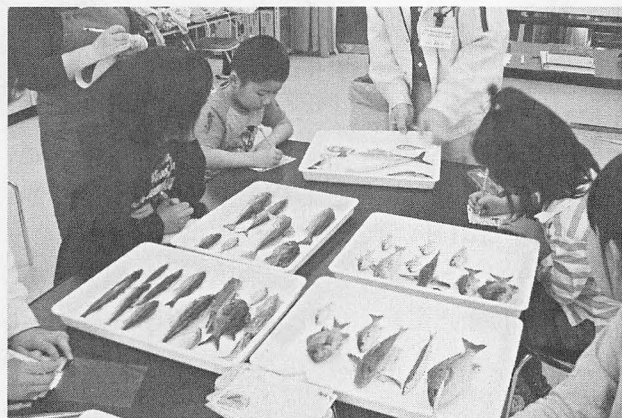
樹齢80年のブナの原生林

## 魚市場で資料採集して 魚の標本を作ろう!

5月13日(土) 小雨 大人9名、子ども6名

友の会初の魚類講座で、瀬能学芸員に指導していただきました。早朝4:45から昼前まで感動の連続、眠気も感じさせない充実度満点の一日でした。趣旨は、自分で資料を集め、それを標本にするという一連の作業を子どもたちに体験させることです。

定置網で獲れた魚は、データとして大事な場所や日付がはっきりわかるので、管轄の小田原市漁協さんに全面的に協力いただきました。



できあがった標本の説明を聴く

水揚げされ選別機ではじかれた魚の中から“自分の魚”を集め、市場で相模湾の魚を見学、食堂での朝食、博物館で標本製作、やり遂げる大切さを学びました。  
(中村恭子)

◆ハウボウのおよいでいるところがきれいでした。標本は針をさしていくのとヒレを見つけるのが楽しくて、9匹も作ってしまいました。(稲川 瞳 小4)

◆名前もわかり、ご飯を食べ、アンコウやマンボウを見ました。またやりたいです。(岡登天志 小3)

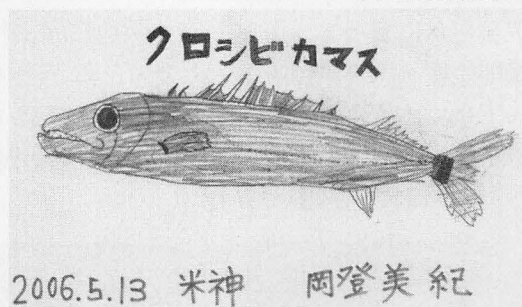
◆標本はゴマサバで、大きくて、もようがキレイだな～と思いました。その日、さしみをさばくことができて、初めて魚をさわれるようになりました。

(斎藤南緒 小4)

◆ぼくがいんしょうにのこったのは、ムツです、ぼくのあいぼうです。  
(斎藤 巧 小1)

◆難しかったけどきれいにできました。お気にいりは、きらきらしたサンマの子どもと、イサキです。

(中村友里恵 小4)



(岡登美紀 小4)

## 富士火山特別巡検

小御岳火山・古富士火山・新富士火山を探して

5月27(土)・28日(日) 20名

講師 萬年一剛氏(温泉地学研究所)、笠間学芸員

小山町上柴怒田で、現在の南九州のシラス台地を形成した始良(あいら)火山の噴出物である始良 Tn 火山灰の白い層が富士山の黒いテフラ層の下部に見えます。爆発の大きさと3万年という時間を実感しました。

古富士火山は新富士火山に被われて東麓では見ることができませんが、白糸の滝で崖面に古富士火山の堆積物が露出しているのを見ました。

スバルライン途中の御庭で側火山の火口とその上下に連なる火口列を見ました。遥か山頂から裾野の大室山にかけて点在している様は壮観でした。

(新藤誠一郎)



御庭の標高約2,300mの火口の縁(火口は右手後ろ)

## 早川水系の文化と歴史の探訪

### 太閤の石風呂を訪ねて

6月3日(土) 曇り 26名

宮ノ下駅に9時30分に集合。天候は歴史を覗き込むような霧でした。講師は、新井学芸員、勝山学芸員です。

コースは、早川と蛇骨川の合流点から蛇骨川に沿って底倉を登り、太閤石風呂、途中シダなどを観察しながらさらに登って、彫刻の森の敷地に囲まれた新田義則の塚へ。キノコを観察したりしながら木賀方面へ下って木賀不動の滝へ。KKR宮ノ下を下りて国道138号を渡り、早川の溪谷に下り、早川を渡ったところのさくら公園で昼食。



蛇骨川左岸にある太閤石風呂

鳥の観察をしながら長めの昼食時間をとって、さらに早川沿いの溪谷探勝路を下り堂ヶ島へ。夢窓国師の庵跡を見てから溪谷の対岸へ渡り、イワタバコの塀が見事な対星館、大和屋の間を抜け、急坂を登り国道1号に出て宮ノ下駅へ、というルートでした。

皆さん、途中思い思いの場所で、これだと思うものがあれば立ち止まり、あるいはしゃがみこんだりして、講師の先生の話に耳を傾けたり、参加者どうしで会話しながらの、ゆっくりした観察会になりました。(関口康弘)

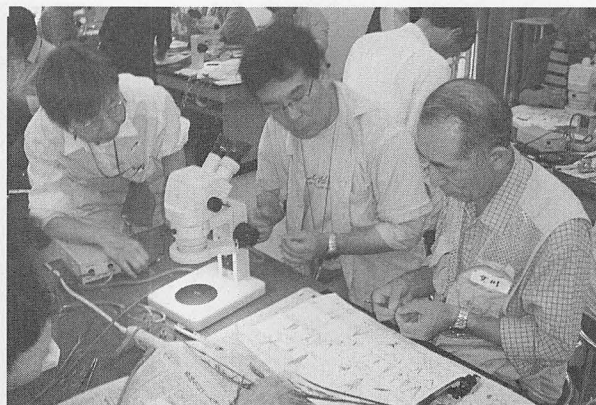
## 第28回植物観察会 入門講座その3 イネ科ワールド

6月6日(火) 晴れ 25名

植物グループのメンバーが講師を務める入門講座の第三弾「イネ科ワールド」を楽しみました。

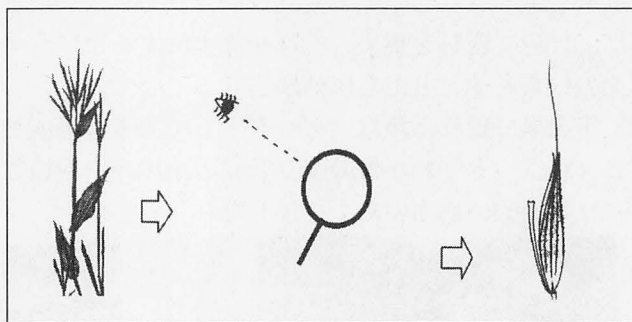
小花を各部ごとに分解し、イネ科の花の造りを手と目で確認できたこと、カラスムギの芒(のぎ)の螺旋が、水の中でクルリクルリとほどこっていく様子

を感動して眺めたことなど、イネ科の不思議に一步近づけたかな、と思える講座でした。



イヌムギの小さな花を取り出すのに真剣です

たくさんのイネ科植物の用意、イネ科の用語の説明、小花の模型での説明など、準備の素晴らしさを感じました。木場学芸員が最後に「虫を呼ぶわけでもない、花粉を風に運んでもらうだけなのに、何とそれぞれが凝った造りをしていることでしょう」と話されたのが、強く心に残っています。(浜岡史子)



## 磯の生きもの観察会

6月11日(日) 雨天のため中止

9月9日(土)にも、磯の生きもの観察会があります。海はまだ夏真っ盛り。いろいろな生き物を探してみましょう! ぜひ、ご参加ください。



★ イラスト・スケッチなどを募集しています ★

観察した虫や植物、地形図など、子どもの投稿也大歓迎!

## ■ わたしの選ぶ“この一冊”

学芸員 瀬能 宏

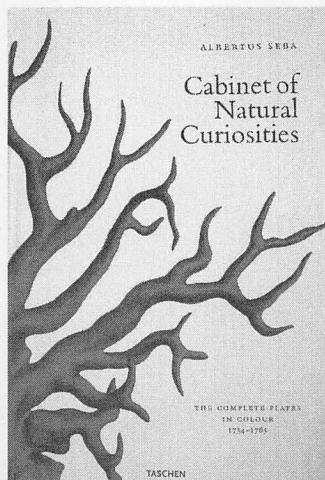
### 『アルベルト・セバの博物宝典』

(Albertus Seba's Cabinet of Natural Curiosities)

イムガルト・ミュッシュ (Irmgard Misch) ほか著

2001年 タッシェン (TASCHEN)

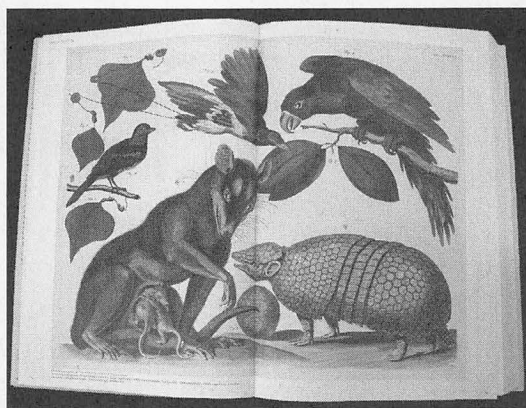
もう4年ほど前になりますが、ドイツの本屋さんから大きな荷物が送られてきました。梱包を解くと、中から現れたのは幅32.5センチ、高さ50.5センチ、厚さ8.5センチ、重さ7.4キロの巨大な本でした。なんだこりゃあと中を見ると、なんと500頁にわたって哺乳類や鳥、爬虫類、魚、昆虫、貝といった生物たちの博物画が満載されており、そして驚いたことにそのすべてが美しく彩色されていたのです。



「これは…」と一瞬間が真っ白になり、次の瞬間、「いったいいくらだ、これ…」と血の気が引きました。どんなに安く見積もっても10万円はくだらな

いだろうと直感したからです。ところが伝票を見ると、188ユーロとなっているではありませんか。当時のレートで2万円をわずかに切る程度だったと思いますが、その安さに二度びっくりです。かくして私がこれまでに購入してきた数々の本の中で、最もお買い得の本と相成りました。

セバ(1665~1736)はアムステルダムで薬剤師をしていた人で、世界中の珍奇な自然物のコレクターでした。1734年から1765年にかけて、そのコレクションの図録が4巻に分けて出版されたのですが、今回紹介する本はその復刻版です。美しく大きな博物画をカラーでお見せできないのが本当に残念ですが、眺めているだけで幸せな気分になること請け合いです。東京に代理店があるので入手も容易。物好きな方にはお勧めですが、普通の本棚には絶対に収まりませんのでその点ご注意ください!!



## ■ 会員の活動紹介

### 「神奈川ムササビ調査隊」小田原市 竹内時男

博物館友の会の皆様には、設立時からお世話になっています。こどもエコクラブの活動をしていた時には、友の会の行事にも参加させていただきました。子どもたちは早川の河原でのヒゲナガカワトビケラの天ぷらの味や三葉虫の模型を作ったことが心に残っているようです。子どもの頃の体験はいつまでも心に残るようです。子どもたちの自然離れが言われていますが、自然とふれあう機会を大人が積極的に設ける必要があると思います。

私はいろいろな活動に参加させていただいていますが、今回は「神奈川ムササビ調査隊」の活動を紹介いたします。ムササビ好きの仲間が集まり、県内の生息分布の調査をしました。ムササビの生息確認方法の研修を行い、社寺林を中心に調査しました。私の分担は県西地区でした。大径木(だいけいぼく)

があり、樹林が連続しているいくつかの社寺林で生息が確認できました。博物館のそばのお寺でも声を聞け、糞も見つかりました。案外身近なところにも生息していることが分かりました。しかし、大径木の減少、樹林の分断など生息環境の劣化も心配されています。博物館で本年発行の「神奈川自然誌資料27」に結果を報告しました。興味のある方はご一読願います。生息情報もお待ちしています。



写真提供  
山口学芸員

竹内さんのブログ「足柄自然アルバム」は子どもに分かり易く足柄の自然を紹介 <http://blogs.yahoo.co.jp/tokio818t>

## 何でも好奇心

### 着生植物の採集道具

学芸員 木場英久

かつて勝山学芸員と私は、大木に着生する植物の分布調査に凝っていた。嵐の後に落ちた枝や倒木を探したり、いい歳をして木登りをして採集できることもあったが、双眼鏡で見上げるばかりで、手の届かない植物があるのを口惜しく思っていた。猿に近い人間を探すのと、人間の希望のわかる猿を探すのとどちらが容易だろうかなんて考えた。

そんなときに考案されたのが1号機である。高桑学芸員がくれた釣り竿（継ぎ足し竿）の先に小さい鎌をガムテープでついただけのもので、経費としては数百円。山中の大木の下で、意気揚々と竿を組み立てたものの、植物は思いのほか幹に丈夫にへばりついていて、鎌を軽く引っ掛けただけでは採れない。力を込めると竿の継ぎ目が外れそう。鎌の背で突き上げて、竿がしなって力が逃げる。やはり引っ張らなくては。継ぎ目にガムテープを巻いて、力いっぱい引っ張ったら、継ぎ目が外れて、高い木の上に鎌をつけた竿の先が残ってしまった。残った竿で鎌をたたき落とし、その日は肩を落として下山した。

リベンジを果たすため、2号機を開発した。今度は振出し竿（太い筒の中から、やや細い竿が次々でてくる竿）の新品。1号機に比べて大きいコストがかかっている（2号にはお金をつぎ込んだ）。ガムテープで鎌をつけるのは同じだが、今度は少しくらい引っ張っても竿がはずれる心配はない。しかもコンパクトで軽量。

いいことばかりのようだが、唯一の難点は竿を延ばして使っているうちに、うっかり突き上げてしまうと、竿が次々と収納されてしまうことだ。高いところから鎌のついた竿先が落ちてくるのは、かなり恐い。恐怖のあまり手を離してしまうと危険だが、竿の一番下を持っている限りは鎌にあたることはない。スギランやヤシヤビシヤクなどの採集に威力を発揮した。



イラスト 知志子

### 情報クリップ

◇会員数 正会員 554名、賛助会員 1名（6月末現在）

常設展観覧無料優待券利用枚数 31枚（6月末現在）

ネコの手貸し隊登録数 52名（講座の補助、入会キャンペーンなどで活躍中）

◇入会促進キャンペーン

4月29日～5月7日の連休に、ライブラリー横の友の会活動紹介コーナーで実施しました。「何事？」と遠巻きに来館者も、顕微鏡を据えて「蝶の羽きれいですよ」と誘うと、近づいて来られる。そこですかさず友の会活動について説明する。「顕微鏡で見る世界」の魅力は集客力抜群でした。夏休みは、8月12～16日に行います。

◇特別展へのお誘い「ふしぎな生きもの菌類」7/15～11/5 開催

博物館の特別展が始まっています。身近にあって大きな世界なのに、気付かないことの多い菌類たち。動物なの？ 植物なの？ 気持ち悪いもの？ それとも素敵なもの？ 特別展をのぞいて、ご自分の目で確かめてみませんか。

## 博物館講座に参加して

### 身近な自然発見講座 長興山コース

2005年5月11日(水) 40名 新井学芸員ほか2名

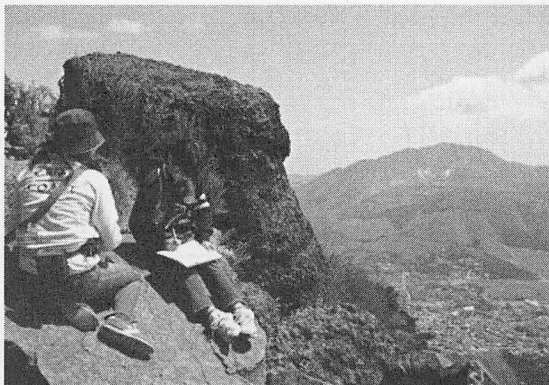
#### 春の地形・地質観察会 金時山コース

5月3日(祝・水) 38名 笠間学芸員ほか3名

金時山は箱根外輪山のなかで一番高い山とされ、「金太郎伝説」でもよく知られる山です。好天に恵まれた金時山コースを歩いて、まさに箱根火山の地形を体感してきました。

スタート地点である金時神社からいきなりの急坂です。体温も上昇し、休憩ポイントとなっている「宿り石」では上着を一枚脱ぐ人も目立ちました。山頂までを一步一步踏みしめ、皆呼吸を整えながらひたすら登ります。参加した親子は「日ごろの運動不足を痛感しますね。それにしても子どもは速い。いつの間にか追い越されていました」と、無事山頂に達してにっこり。

登山者で混雑する山頂では、それぞれが展望の良い場所を選んでスケッチをしました。子どもたちは



箱根が一望できるベストスポット

色鉛筆を走らせながら、神山や芦ノ湖が周囲を外輪山に囲まれたカルデラの中にあることに気づきます。また神山が崩れて早川の谷をせき止め、芦ノ湖ができたことを目で確認しました。

観察の余裕ができた下りの長い坂道は、笠間学芸員のお話を聞きながら、都度観察ポイントに集合します。宝永の噴火口あたりに若干雲がかかっているものの、やはり霊峰富士には惹きつけられました。富士山宝永噴出物が金時山にも降り積もったという証拠も確認しながら先を急ぎます。

最後の観察ポイントでは、箱根火山形成以前にあったとされる地層を確認しました。たまねぎ状の風化構造もみられる露頭の周辺に、小さな貝の化石が見つかりました。子どもたちは壊れやすい石の塊をそっと手にとりながら、しばしの間お宝探しに熱中しました。

(鶴田知志子)

皆さんは身近な自然と言うと何を思い浮かべるでしょうか？ 私の子どもの頃は近所に田んぼや畑、雑木林のある山が普通にありました。そこには虫やカエルが当たり前にいて、野山を駆け回ることができました。が、現在同じ場所を見てみると以前のままだと残っているところはほとんどありません。造成されているか、あっても藪で入ることが困難です。これは日本全国で同じ状態ではないでしょうか。

周辺の自然が失われていく中、身近な自然とは何だろうと考えているところ、この講座に行き当たりました。館の周辺もかなり変わっているのですが、まだ自然が残っている印象を受けたので、ぜひ違う時期にと思い再び同行させていただきました。

今回は新緑の時期で、山肌はすっかり色とりどりの緑に覆われていました。一言で山の緑と言っても実際には多様な色があるものです。特に印象に残ったのはシロダモの若葉でした。黄色に近い色が実は柔らかい毛の集まりで、触るとビロードのような感触が伝わってきました。これは好評だったようで多くの方が感触を楽しんでいました。よく目立つウツギの花を眺めながら雑木林を歩いていると「月・日・星」で有名なサンコウチョウのさえずりが聞こえてきました。遙か南から渡ってきたこの夏鳥は、ここでも繁殖活動をしているそうです。若葉が生い茂った森の中で夏鳥の



可憐なマルバウツギ(卵の花)

姿を見ることは難しいのですが、キビタキが目の前に飛んできた！ という運の良い人もいたようです。他にも沢筋ではタゴガエル、イトトンボの仲間など様々な生きものに会い、少々贅沢な自然を感じることができました。

もう少し自分たちの身近な自然に関心を持って、適度に付き合うことができれば、すべての生きもの(人間も含む)にとって良い自然環境が保たれていくのではないのでしょうか。皆さんも気軽に楽しめるこの講座で自然を感じてみてください。(村石健一)

この講座は事前予約不要です。当日、博物館正面入口前にお集りください。詳細は、博物館HPをご覧ください。

## 行事案内

### ◆丹沢の沢でパンニング

日時 7月29日(土) 9:45 御殿場線谷峨駅集合  
場所 山北町細川谷

### ◆夏休み昆虫探検隊

日時 7月29日(土) 8:50~15:30  
場所 湯河原町幕山

### ◆夏休みオープンラボ「小さな探検隊」 チラシなし

博物館周辺で昆虫採集・標本作り(当日・各5名)

日時 8月5日(土) 13:00~のみ  
8月6日(日) 10:00~、13:00~  
8月13日(日) 10:00~、13:00~

場所 博物館周辺、博物館内  
対象 子どもとその保護者 ※会員以外も参加可  
費用 参加費は無料ですが保険料がかかります。

### ◆水餓鬼を育てる! Part3

日時 8月12日(土) 9:30~15:30  
場所 博物館横の早川河原

### ◆岩石標本を作ろう(一日コース)

日時 8月19日(土) 9:30 新松田駅前集合  
場所 松田町酒匂川、博物館内

### ◆岩石標本を作ろう(半日コース)

日時 8月26日(土) 10:30~15:30 随時  
場所 博物館内

### ◆特別巡検「赤城山」 都合により中止します。

### ◆第29回植物観察会「富士山五合目」

日時 9月1日(金) 8:30~16:00  
場所 富士山五合目

※7月19日(水)「富士山を歩こう」が変更

### ◆磯の生きもの観察会

日時 9月9日(土) 9:30~15:00  
場所 真鶴町三ツ石海岸

### ◆大磯丘陵テフラ観察会

日時 9月23日(土・祝) 10:40~  
場所 大磯丘陵

### ◆第30回植物観察会 入門講座その4「つる植物」

日時 10月3日(火) 10:00~15:00  
場所 博物館周辺、博物館内

### ◆火山地形ウォッチング

日時 10月14日(土) 10:00 桃源台バス停集合  
場所 芦ノ湖西岸

### ◆◆第72回 サロン・ド・小田原

演題 あなたは「みどり」が好きですか

演者 松田輝雄

(元NHKエグゼクティブアナウンサー)

日時 8月12日(土)  
講演 17:30~18:30、茶話会 18:30~20:00  
場所 県立生命の星・地球博物館1F講義室  
茶話会はレストラン・フォーレです。

### ◆次回の通信発送 10月20日(金) 10:00~

### ◆各行事への参加申込み方法

行事への参加申込みは、同封チラシを参照の上、  
友の会事務局までお申し込みください。

尚、締切り済み講座でも空きがある場合もあります  
ので、事務局までお問合せください。

### 友の会ブログ・ホームページのQRコード

友の会活動の最新情報はブログに、全体の情報は  
HPに掲載されています。どうぞご利用ください。



友の会ブログ

<http://blog.livedoor.jp/kpmtomo/>



友の会HP

<http://homepage3.nifty.com/tomonokai/>

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館 友の会  
Vol. 10, No2, 通巻53号 2006. 7. 10 発行

編集 友の会広報部

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499

TEL : 0465-21-1515 FAX : 0465-23-8846

E-mail: tomonokai@nh.kanagawa-museum.jp